

2022年2月27日 主日礼拝

説教題「その道は十字架に向かう」ルカによる福音書 4 章 38～44 節

主任牧師 加藤 誠

「しかし、イエスは言われた。『ほかの町にも神の国の福音を告げ知らせなければならない。わたしはそのために遣わされたのだ。』として、ユダヤの諸会堂に行って宣教された」(ルカ4章44節)

主イエスは「癒し主」と呼ばれますが、その場合の「癒し主」とはどういう意味なのでしょう。主イエスはさまざまな「病気を癒す」方として来られました。ルカ福音書4章に紹介されているカファルナウム伝道でも、「汚れた悪霊に取りつかれた男」を悪霊から解放し、「高い熱で苦しむシモンのしゅうとめ」を癒しています。それだけでなく「日が暮れると、いろいろな病気で苦しむ者を抱えている人が皆、病人たちをイエスのもとに連れて来たので、イエスはその一人一人に手を置いていやされた」のでした。「治療する」ことを「手当てする」と言いますが、主イエスの手のむくもりを通して、人びとは自分の苦しみや悲しみを包み込むあたたかい祈りを感じ、病の中から立ち上がる力を注がれていったことなのでしょう。

漢字の「病」という字は「病む」とも読みますが、これは「夕立が止む」「風が止む」の「やむ」に通じる言葉だそうです。病気になると「仕事ができなくなる」、「学校に行けなくなる」というように、私たちの生活や行動はストップをかけられます。いつもできていることが「できなくなる」のです。

今朝のペトロのしゅうとめの癒しの場面を読んだ時、最初は「熱を出しただけでイエス様が呼ばれるんだ。次から次へと大変だな」と思いました。けれど熱は馬鹿にできません。体温がほんの1℃高くなっただけで私たちは寝込み、普段の行動ができなくなる。それが数日間続けば大変なことです。その熱のもとになっている病気が私たちの生活を、人生を大きく変えてしまうのです。「たかが熱」とは言えない。その熱のもとになっている病気の癒しを私たちは切に願うのです。

ペトロのしゅうとめは主イエスに癒していただくと、すぐに「もてなし始めた」とあります。熱が下がって病気が治っただけにとどまらず、人びとのために働く「喜び」、主イエスの働きをお手伝いできる「喜び」に彼女が生かされている姿に心動かされます。主イエスの「癒し」はそのようにして、私たちを神さまと隣人につなげて新しい働きに生かす、そのような「癒し」でもあるのです。

ところが、です。翌朝主イエスは人里離れた所へ出ていかれました。弟子たちからも離れて一人で祈る時を必要とされたのでしょう。捜しに来た群衆が「自分たちから離れていかないように」しきりに引き留めますが、主イエスは言われます。「ほかの町にも神の国の福音を告げ知らせなければならない。わたしはそのために遣わされたのだ」(4・43)と。そして町を出ていかれたのでした。

これはいったいどういうことなのでしょう。主イエスの言葉には「冷たさ」を感じます。人びとは深く失望したことでしょう。怒り出したかもしれない。人びとの叫びを背中に浴びながら、しかし主イエスは「ほかの町」へと向かわれたのでした。

実は似た場面がヨハネ福音書 6 章にあります。五千人以上の人びとを五つのパンと二匹の魚で満腹させられた主イエスに人びとが賞賛の叫びを上げますと、「イエスは人びとが来て自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでまた山に退かれた」(6・15)と記されています。人びとの称賛と切なる願いを背にして主イエスはどこに向かわれたのでしょうか。これはわたしの理解ですが、主イエスは主なる神の声を聞くために一人静かなところに退かれ、主なる神により「十字架への道に向かうよう」促されたのではないかと思うのです。

人が生きるときに「病の癒し」がどれほど切実な願いであるか、それを主イエスは知りつつ、しかしもっと深く私たち人間が必要としている「癒し」を主イエスは見ておられました。それは「愛なる神さまとの関係の回復」という「真の癒し」です。神さまに背を向けて罪にまみれ、神さまを毎日悲しませている私たちを、神さまのもとに連れ戻すために、主イエスは十字架に向かわれた。なぜなら、私たちが生きながらにして根深く抱えている罪がどれほど悲惨なものであるか、断罪される必要があったからです。神さまは私たちの罪をはっきりと突きつけた上で、その罪にまみれた私たちには無条件の赦しを宣言してくださった。それが十字架です。

ここに主イエスが「人びとの願いを叶える栄光のメシア」ではなく「人びとの罪に向かい、神の愛のもとに立ち帰らせる苦難のメシア」として来られたことが示されています。主イエスは「病気の癒し」にとどまらず、私たちがもっと深いところで必要としている「真の癒し」を祈り、十字架に向かって歩まれた救い主なのです。

先日 8 8 歳で召された母は、戦後はじめて出席した教会の礼拝でアメリカから来た女性の宣教師が人びとを前に聖書の話をしている姿に衝撃を受けたと言います。若い女性が家族を置いて、異国の地に一人で来て、こんなに生き生きとしている。

「ここには何かある」と思ったと。後に新生讃美歌 209 番『われは癒えぬ』という讃美歌を作詞した時、このように書いています。「私は高校 3 年から 6 年間結核で療養し希望を失って歩む日々でした。そんな時友人に誘われて教会の礼拝に出席するようになり、イエス様に会いました。神様は病める者の悲しみを包んでくださる愛の方であることを知りました。また、人生を一人こぎ行くときの不安や、厳しさにおののく時、語りかけて下さる主のみ言葉は、希望を持って一歩踏み出す不思議な力を内側から与えて下さることに気づきました。ベタニヤのラザロは死にましたが神に『ラザロ、出て来なさい』と呼びかけられて命を新しくされました。自己中心や愛の足りなさ、愚かさなどの罪に死んでいる命のまま、勝手に生きていた私に、“神の憐れみがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と寛容と忍耐とを軽んじるのですか。”(ローマ 2：4)と迫って下さいました。教会堂で、十字架を仰いで神様に赦しを乞うた時、主は両手を広げて迎え入れて下さいました。古い自分が死んで、今は、キリストに在って癒され、立ち上がり、新しい命に生きる喜びをいただけたのです。」

母は、主イエスとの出会いを通して「結核という病の癒し」以上の「真の癒し」へと導かれました。私たちを「真の癒し」に導くために十字架に向かう道を歩み取られていった主イエスの深い祈りを大切に受けていきたいのです。